

私には二つの夢があります。一つは「車いすダンスで世界を回りたい」という夢です。多くの人に私のダンスをみて頂いて、元気になってもらえたら最高です。もう一つは「自分から誰とでも話しかけられるような人になりたい」という夢です。今まで私が苦しかったときに声をかけてくれた人がいたから、今の私があります。だから今度は私がいろんな人に声をかけていきたいのです。

私は一九九一年十二月、大阪市で生まれました。生まれてすぐに障がいを持っていることが、わかりました。骨が擦り減ってだんだん変形していく進行性の病気です。生まれつき、手足が短くて、生まれた時は心臓に穴が空いていたそうです。同じような、症状の人は半年以内に亡くなると知った父、祖父はすごく悲しかったそうです、私が生きた証を残したいと、すぐに区役所へ出生届を出して、「みくり」という名前がつきました。心臓の穴はだんだん小さくなって、半年後にはふさ

がりましたが、似ている症状の人とは違う病  
気みたいで、今もまだ病名は決まっていませ  
ん。私は、生後十一ヶ月で歩き始めたそう  
す。3歳から保育園に行くようになって、同  
じ歳の子から「爪ないやん」「背、低いな。  
一つ下の歳の子と同じくらい。」と言われ、  
「なんで私だけ？みんなは、なんで爪がある  
の」と不思議でした。しかし、それ以外はみ  
んなと一緒に遊んだり、走り回ったり周りの  
子とそんなに違いはないと思っていました。

小学校の入学式当日、今でも覚えていま  
すが、急に足が痛くなり、車いすに乗る事にな  
りました。痛くなった理由は足の骨が擦り減  
って変形していたからです。車いすから降り  
て歩きだそうとすると足に激痛がはしり、車  
いすで外へ出てみても全く思うように操作で  
きず、休み時間に一人で教室にいる事もあり  
ました。そして二年の夏手術をする事になり  
ました。一度目の手術で足首の先から付け根  
まで装具が取り付けられ、二度目の手術で、

腰の骨をひざの関節の擦り減った部分に移植  
しました。手術の痛みが落ち着いた頃、リハ  
ビリを開始しました。そして医者は私にこん  
な事を言いました。「走る事は足に負担がか  
かるので、難しい。立つ事もこのまま進行し  
たら難しくなるだろう。」手術をしたら、き  
っと走り回れるようになると思って痛みに堪  
えていたのに何で：と思いました。退院し、  
学校生活にも、慣れてきた三年の時、学校に  
ある人達が講演に来てくれました。その中の  
車いすに乗っていた一人の男性が、「僕と一  
緒に踊ろう」とダンスに誘ってくれました。  
こうして、私は「車いすダンス」に出会った  
のです。歩けない私にも「車いすダンス」と  
いうスポーツが出来るという事を知り、考え  
方が少し変わりました。最初は、私には「車  
いすダンス」は出来ないと思っていました。  
でもいろんな人が私にダンスを教えてくれ、  
たくさんのステージにも出させてもらいまし  
た。観客の方の拍手がすごく嬉しく、達成感

も感じました。「車いすダンス」を通じて、  
何でも最初から出来ないと決めつけてはいけ  
ないということに気がきました。  
六年になって、クラスメイトから「邪魔」  
と言われたり、蹴られたり、車いすを傷つけ  
られたりするようになりました。そんな時、  
クラスの中で私の事をかばってくれた子がい  
ました。その子は、私と関わっていることも  
あり、他のクラスメイトから「気持ち悪い」  
と言われたり、上靴を隠されたりしていまし  
た。私は気にしないようにしていましたが、  
だんだんエスカレーターしていき、すごく嫌な  
気持ちでした。「自分のせいで私をかばって  
くれている人まで、嫌な気持ちにさせたくな  
い。」そんなある日、エレベーターに乗って  
いると、後ろから車いすごと倒され、笑われ  
ました。私は起き上がる事も出来ず倒れたま  
まで、非常ボタンにも手が届きません。長い  
間エレベーターの中にいて上がったり下がっ  
たり、していました。恐怖で、すごく長い時

間に感じましたが、実際には短い時間だった  
のかもしれない。私はそのことがきっかけ  
で、しばらく学校に行けなくなりました。そ  
のときは車いすダンスだけが私の人生の支え  
でした。中学校に入学しても、同じ小学校だ  
った人とエレベーターと一緒に乗る事がとて  
も恐怖でした。あの時の怖かった気持ちが蘇  
ってくるからです。中学三年間は学校では友  
達を作らないと決めました。もし、私が親し  
くしている人がまた小学校の時みたいに嫌な  
思いをしたら：と考えるしまったからです。  
だから私の自慢は友達がない事でした。授  
業中に話しかけられたりしないし、楽だと思  
ったりもしました。でも、どこか寂しいとも  
感じていました。中学校の先生から「みくり  
さんの笑顔を見た事がない」と言われました。  
気付けば、私は学校ではあまり笑う事がなか  
った様に思います。その当時、本当の私を出  
せるのはダンスのメンバーという時だけでし  
た。

どんな人でも「人を信じること」は難しいことだと思えます。しかし信じてくれる人が一人でもいれば、時間はかかるけど、きっと周りの人をだんだん信じられるようになると思います。それまでは、信じられるのはダンスのメンバーだけでした。でも高校になって少しずつ周りの人を信じられるようになります。した。私の高校は単位制高校で、いろんな人がいます。制服もなく、時間割も自分で作れるので、個性を生かす事が出来ます。高校では、多くの人が私に声をかけてくれました。不安も少なくなり、挨拶をしたりできるようになります、少しずつ同じ年の人とも話しが出来るようになります。障がいをもつ先輩たちもいて、悩みを聞いたり、自分のことを話したりできる関係になりました。いろんな事に挑戦出来て、「私の居場所」をみつけたように思えます。本当の居場所とは安心できる環境で、お互いに協力出来て、信じ合い、影響しあえる仲間がいる場所だと私は思えます。